色彩学　第2巻　第2号　2023年　75－76

特集「大会支援のためのクリエーション」
Special Issue: Creation for Supporting Academic Conferences

ACA2019 Nagoyaのカンファレンスバッグ製作
Conference Bag Production of the ACA2019 Nagoya

祖父江 由美子　色彩講師
Yumiko Sobue　Color Instructor

1. ACA2019のテーマとおもてなし

ACA2019（第5回アジア色彩学会）は2019年11月29日から12月2日まで，名城大学にて開催された．テーマは「カラーコミュニケーション」であった．アジアを中心に世界10カ国から約140件の発表が集まり，活気ある学術交流の機会となった．ACAは日本では初開催であったため，実行委員会では，日本の伝統文化の豊かさを紹介しながら参加者をもてなすよう工夫した．受付前には，尾張津島天王祭りを描いた屏風絵を展示し，前夜祭では着物の独創的な帯結びを紹介し，セッション間の休憩時には茶の湯のお点前で一息つけるようにした．最終日のエクスカーションは，晩秋の色が残る高山と白川郷へ赴き，カラーを通じた4日間のコミュニケーションを締め括った．

2. バッグのコンセプト

実行委員会において，カンファレンスバッグの製作が決定され，筆者がその担当となった．柄や素材で日本ならではの特徴を表現し，「おもてなし」の気持ちを伝えるものにしたいと考え，正絹の着物地で製作することを提案した．絹の特徴は，上品な艶と驚くほどの軽さである．絹の繊維は人間の肌を形成しているタンパク質と近い成分でできているため，肌あたりが優しく滑らかで，アジアの国々の民族衣装にも欠かせない存在である．正絹の着物が完成するまでには，染めや織りに関わる職人の技術と膨大な時間の手作業がある．同じ背景を共有するアジア諸国とのコミュニケーションにもふさわしい素材であると考えた．

3. バッグの製作

3. 1　素材

新品の着物生地は高価なため，リサイクルの着物や反物を利用することを決め，4月に実行委員で名古屋の大須に出かけた（図1）．ここは古着を扱う店が集まる全国でも有名な場所で，着物の購入に訪れる外国人観光客も多い．リサイクル呉服店を何軒か回り，着物地や帯地の反物の他，質の良いリサイクル着物を手に入れた．大須観音の境内の骨董市でも，金糸入りの菖蒲柄の西陣織の反物を購入した．菖蒲の葉の香りは厄災を払うとされ，魔除けのお守りとされている．購入する素材は正絹のみとし，紬など生地に張りがあり丈夫なもの，艶や手触りが優れたもの，吉祥模様など柄に魅力のあるものを選ぶよう心がけた．着物は手分けして丁寧に解いた．着物生地は，学会員の家族からも提供してもらい，必要数をそろえ縫製の手配をした．しかし8月，参加登録者数が増え，バッグ数も増やさねばならなくなった．夏の間は薄地の反物や浴衣地しか店頭になく，生地探しが難航した．秋を待ち，質の良いものを一つ一つ買い足し，モダンな幾何学模様の紬など，男性向きの色柄もそろえることができた．

図1 大須で素材を購入

3. 2. デザイン

着物地の一反は，幅38cm，長さ12mとおおよそ決まっている．試作を繰り返し，A4サイズの資料がゆったり入るよう，縦34cm，横32cmの長方形とした．持ち手には，柔らかく手になじみやすい鞄用の布テープを選び，並べた時の統一感を考え，濃紺一色とした．長さは，エクスカーションのバス内や現地での買い物にも使用しやすいよう，腕にかけて持ちやすい42cmとした．

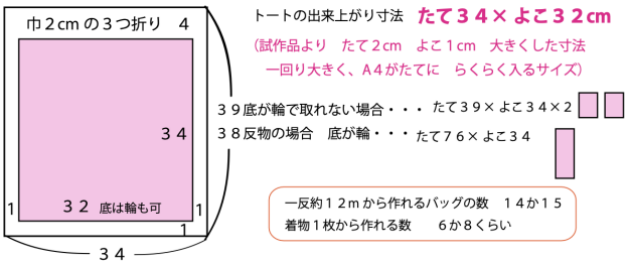

図2 バッグの設計図

3. 3. 大会ロゴマーク入りのネームタグ

バッグの内側に，大会ロゴマーク入りのネームタグを付けることを決め，学会員の多田真奈美氏にデザインを依頼した．タグの印刷は，オンラインでの注文が可能な英国 CONTRADO 社のプリントサービスを利用した．まずネームタグのサンプルパックを取り寄せ，製作チームで色と柄を話し合った．タグの表面には，大会ロゴマークと開催地情報を，裏面にはクリーニングマークを配置し，着物生地であることがわかるよう 100% pure KIMONO silk と記載した（図３左）．２つ折りで５×５㎝のサイズを３００枚注文した．タグは，艶のある地厚のサテン地が絹に似ており，バッグの口の内側に挟み込むとそのロゴや彩りがちょうどよいアクセントとなりデザイン性の高い仕上がりとなった（図３右）．

3. 4　裁断と縫製

着物生地も帯地も，模様に上下があるものは，柄行きに応じて裁断方法が変わる．また，生地の風合いを損なわずハリを持たせるため，生地に薄地の接着芯を高温で密着させることが必要であった．接着芯は表地の色に合わせ，黒とベージュの２色を準備した．縫製の際には，生地の色に合わせてその都度縫い糸を掛け替える作業も必要である．反物の傷などを避けながら，一つ一つを手仕事で行う作業は，手間と時間を要するため，裁断と縫製は熟練した専門家に依頼した（図４）．帯地は硬くて張りがあるため，縫うのに困難を極めたそうである．刺繍があるものは，生地裏に糸が長くわたり，その始末にも時間を要したと聞く．バッグは，一枚の着物から 10 個，一反の生地からは 15 個が裁断でき，最終的に 24 柄，290 個が出来あがった（図 5）．

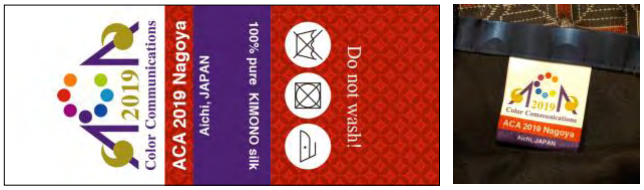

図3　タグのデザイン（左）と仕上がり（右）

図4　製作方法について入念に検討

4. バッグの展示と受け渡し

バッグの受け渡しコーナーは受付近くの壁面本棚の前に設置した（図６）．１～24 の番号を付けたカンファレンスバッグをピラミッド状に展示した．手元で生地の手触りを確認できるよう，小さな生地見本を添付したパネルを作成し，説明を加えた．ここでは，着物姿の学会員や手の空いた学会員が交互に対応にあたり，海外からの参加者に模様の説明をするなど，談笑する姿が印象的であった．

5. バッグの評価とまとめ

バッグは，多くの参加者から好評を得た．「軽くて小さく畳めて機能的」「丁寧な縫製がされており重い書籍を入れても心配ない」「接着芯が表地に密着しているので仕上がりが美しい」「家族が気に入って使っている」などの評価を喜ばしく思う．着物は，体型や年齢にあわせて世代を越えて仕立て直しも染め直しも可能で，世界に誇れる日本古来の SDGs の見本とも言える．このバッグが，着物文化とともに長く大切にされることを心から願っている．

http://www.color-science.jp/ACA2019/Attendees/index.html#CB

図5　仕上がったバッグ

図6　バッグの受け渡しコーナー